

# 「国際結婚」と外国人母の日本への適応行動に関する研究

浅井 直子

日本では、1990 年以降、「ニューカマー」と呼ばれる新規外国人が激増してきた。そのなかには、日本人男性と国際結婚した中国、フィリピン、韓国・朝鮮などからのアジア人女性たちが含まれる。多くの外国人妻たちは、日本で育った子どもとのコミュニケーション・ギャップや、母国と日本間の経済格差に由来する日本人家族や地域からの差別意識、そして日本社会・文化への同化圧力のなかで、エスニック・アイデンティティの喪失感など、多くのストレスとプレッシャーを経験している。

本研究の目的は、日本人と外国人の国際結婚の実態を歴史的に考察し、そのうえで、日本人男性と国際結婚をした外国人女性の「語り」から分析を試みるという、社会言語的解釈によるアプローチを用い、外国人母の異文化適応行動の全体像を明らかにするものである。

本研究では、日本人男性と国際結婚をし、日本で子育てをした外国人女性（中国人 2 名、フィリピン人 2 名）を研究対象とした。彼女たちがどのように母国と文化・習慣・価値観の異なる日本で子育てをしてきたのかを聞き取り、いかなる行動が、日本での生活・子育ての苦勞を乗り越えていく原動力となったのかをグラウンデッド・セオリー・アプローチを用いて分析し、「日本への適応プロセス・フレームワーク」を構築することを目指した。更に、異国である日本で生きてきた人生の有り様を複線径路等至性アプローチ（Trajectory Equifinality Approach：TEA）を用いて描き出すことを試みた。

## 第 1 章 リタラチャーレビュー

第 1 章では、本論文の研究テーマである「日本人男性と国際結婚をした外国人母が、異国である日本でどのように日本社会・文化へ適応し、子育てをし、そして彼女たち自身の人生を歩んできたのか」を研究調査していく前段階として、「国際結婚」や「日本に暮らす外国人」に関する先行研究を検証するためのリタラチャーレビューを行った。われわれの社会にとって身近になりつつある「国際結婚」とは、そもそもどのようなものであるのか。そして、「国際化」の進む日本における外国をルーツとする人びとの現状はどういったものであるのか。また、多くの外国人女性が海を渡り、日本人男性と結婚をする、その背景とは何か。こうした問いへの解答を先行研究から探った。

第 1 節では、具体的なデータを用いて、現在の日本の「国際化」、日本における国際結婚の現状を俯瞰していった。第 2 節では、アメリカの文献をもとに、アメリカにおける「国際結婚」の定義を考察した。人種のるつぼであるアメリカにおける「国際結婚」が、日本人の捉える「国際結婚」といかに異なり多様なものであるか、また日本人の考える

「国際結婚」が、どれほど狭義なものであったかを捉えた。第3節では、日本の「国際結婚」の歴史を振り返った。明治時代の日本初の国際結婚に関する規則「太政官布告103号」の制定に始まる国際結婚の歴史、そして戦後の「戦争花嫁」に言及する。今や、「豊かな国」日本に多くのアジア系女性が憧れ、日本人男性との結婚という人生の選択をしているが、かつて、日本の多くの女性が、豊かな生活を夢見て、アメリカなど欧米諸国へと渡り、国際結婚をした時代があった。

第4節では、日本で暮らす外国をルーツとする人びとと彼らが抱える問題と向き合う。日本が経験したバブル経済、そして1990年の入管法の改定によって爆発的に増加していった日系ブラジル人を筆頭とする日本で労働する外国人たち、経済大国・日本で自分の人生を切り開こうと海を渡ってきた途上国の女性たち、そして、彼ら・彼女たちのような「ニューカマー」の子どもたちに焦点を当てた。こうした外国にルーツをもつ子どもたちには、日本生まれの者もいれば、親に伴って来日した者もいる。また、来日時の年齢もさまざまであり、その年齢によって異なる問題を学校や地域で抱えている。言葉の問題、学業達成の苦勞、人間関係の困難さ、進路決定の難しさ、アイデンティティ・クライシスなど、子どもたちが成長していくうえで、彼ら特有の壁が立ちはだかっている。

第5節においては、日本で暮らす外国人の子育てに関する先行研究に焦点を当てた。日本語の不自由さ、日本の文化への不案内から起こる外国人母特有の子育ての困難である。それらは、家庭・学校・病院など身近な場所で日々直面する問題である。そして、そもそも「国際結婚」という結婚生活を送る女性は、どのようなストレスや困難にさらされているのであろうか。日本という「夫の社会」における彼女たちのアイデンティティの問題、さらに外国人妻たちが結婚を機に属することになったコミュニティのなかで「周辺化」されていく様子を記述していった。

第6節では、本論文の研究対象者である中国人母の出身地である中国の「国際結婚」の背景と要因を整理した。中国は、かつての「封建的な」家族観から、現在の「男女平等」という価値観に基づいた家族観への変遷を遂げた。だが一方で、農村戸籍の若い女性たちは、農村地域にいまに残る男尊女卑や家父長制によって、家庭でも、コミュニティでも、そして出稼ぎ先においては「グローバル経済」の歯車となって、「ネオ家父長制度」の名のもと搾取されていく。どこで生きていても、農村出身者である彼女たちは、「周辺化」された存在であり、そこから抜け出すための数少ない選択肢の一つとして、「国際結婚」という人生を選び、その多くは日本を目指すのである。そして、受け入れ側である日本においては、「農村男性の結婚難」という背景があることもよく知られているところである。中国社会で周辺化され、自身の人生をリセットし再出発を目指す中国人女性と、日本人女性から敬遠され結婚難に陥っている日本人男性の間を取り持つ「国際結婚斡旋業者」の存在についても着目した。祖国において周辺化された存在であった中国人女性は、結婚によって新たな困難に直面している。それは、自分の生まれ育った中国とは異なる異文化への適応の困難であり、日本人夫やその家族、そして彼女が属するコミュニティからの日

本社会への「同化」の強制というプレッシャーである。日本人夫やその家族は、中国から「花嫁」を迎えるにもかかわらず、彼女たちの祖国・中国の文化や価値観を家庭のなかに取り入れることは望んでいない。中国人母たちは、そのような環境下で、わが子にどのような子育て・教育をしていくのか、彼女たちのストラテジーを先行研究から見ていった。そして、本章の最後となる第7節においては、「本研究の独自性とリサーチクエスチョン」として、本論文のオリジナリティがどこにあるか、そして最終地点として何を目標としているかを述べた。

## 第2章 研究方法

第2章では「研究方法」について述べた。本研究が採用した質的研究について、そして実際に分析方法として選んだグラウンデッド・セオリーと複線径路等至性アプローチ (Trajectory Equifinality Approach : TEA) について説明している。

第1節「質的研究とは」の第1項では、質的研究とは、そもそもどういうものなのかを詳説した。質的研究の歴史、定義、量的研究との違い、さらに実証主義の立場からの批判、それに対する質的研究者の質的研究の現代における重要性および量的研究の限界についての議論を、アメリカの文献を中心にレビューした。第2項では、本論で分析方法として採用するグラウンデッド・セオリー・アプローチの歴史についてまとめた。1960年代、アメリカでグレーザーとストラウスによって見出されたこのグラウンデッド・セオリーという質的研究法が、どのような背景から誕生し、いかなる変遷をたどり、現在に至るのかを見ていった。そして今日、グラウンデッド・セオリーの開発者の一人であるグレーザーを代表とする、客観主義・実証主義に偏重するグラウンデッド・セオリーに対抗する立場から、構成主義的グラウンデッド・セオリーという潮流が生まれていることにも触れた。このグラウンデッド・セオリーは、最もフィールドに近く、経験者の立場から得た経験を研究することで、客観主義にとらわれることなく質的研究の伝統の発展を推進することを目指している (Charmaz, 2000)。続いて第3項では、複線径路等至性アプローチ

(Trajectory Equifinality Approach : TEA) についての説明を行った。TEA は、この世に生をうけた個人が、彼/彼女が生きて暮らしていく環境のなかで、生命を維持し生活していくプロセスを描いていくという心理学的試みである (サトウ、2015a)。TEA は、個人の人生を時間とともに描き出していく複線径路等至性モデル (TEM)、歴史的構造化招待 (HSI)、発生の三層モデル (TLMG) を統合・統括する考え方からなる質的研究アプローチである (サトウ、2017a)。そして第2節で、調査方法、第3節で倫理的配慮、第4節で分析方法と本論における研究の進め方を具体的に説明した。

本研究で実施された、具体的な「調査方法」および「分析方法」のプロセスは、以下の通りである：

### 1) 調査方法

本研究は、日本人男性と国際結婚をした、日本に在住する外国人母を対象として調査研究を行ったものである。東京近郊のX県で暮らす中国人女性2名およびフィリピン人女性2名に対して、それぞれ個別に半構造化面接と2回の追加面談を実施した。(尚、本研究は、明星大学研究倫理委員会の承認を得て実施している。)

### 2) 調査対象者

- ① Tさん：中国・雲南省出身の47歳。高校卒。工場でパート勤務。国際交流ボランティア活動。夫(55歳)、中1長男、小5長女。
- ② Mさん：中国・上海市出身の52歳。旅行会社経営。日本に留学、修士号取得。夫(54歳)、高3長男、高1次男、小6長女。
- ③ Gさん：フィリピン・セブ島出身の49歳。四年制大学卒。フィリピン人児童の学習指導員、病院・法律相談の通訳などのボランティア活動。夫(65歳)、長男(23歳・会社勤務)、長女(専門学校生)。
- ④ Lさん：フィリピン・セブ島出身の45歳。二年制ビジネス系専門学校卒。工場勤務。夫とは離婚、現在は一人暮らし。元夫(59歳)、長男(専門学校生)、長女(高校生)。

### 3) 分析方法

データ分析の方法として、グラウンデッド・セオリー・アプローチと複線径路等至性アプローチ(TEA)の2つを使用した。本研究ではまず、グラウンデッド・セオリーの「データ分析の流れ」に従って、「データの読み込み」、「コーディング」、「ラベリング」、そして「理論的飽和」を行った。具体的な分析手順としては、まず録音したインタビュー内容を、すべて逐語録に起こし、分析データとした。次に、インタビュー対象者が語ったデータ内容に変化を加えることなくコーディングを行った。コーディングによって概念化された“グループ”は、コアカテゴリー、サブカテゴリー、そして下位カテゴリーへと分類された。それぞれのカテゴリーは、その後ラベリングされ、5つのメインカテゴリーが形成された。分析結果はその後、ストーリーラインを通して分析を行った。最後に、カテゴリー間の相関関係を考慮しながら、適応プロセス・フレームワークを構築していった。

次にTEAの分析手順としては、グラウンデッド・セオリーの分析で得られた「下位カテゴリー」を分析単位として、4名の外国人母のTEM図を描き、時系列に彼女たちの適応へのプロセスを導き出した。さらに、TEM図で抽出された「分岐点」から「発生の3層モデル(TLMG)」を描き出し、外国人母4名の日本適応までの意識の変容を可視化した。

## 第3章 中国人母の日本社会への適応行動に関する研究—グラウンデッド・セオリーによる分析—

第3章においては、日本人男性と国際結婚をし、日本で子育てをした中国人女性2名のインタビュー・データをグラウンデッド・セオリーを用いて分析を行った。

第1節では、研究参加者である中国人母2名のそれぞれの中国時代と日本来日後の概要を述べている。第2節においては、二人の語りを、グラウンデッド・セオリー・アプローチによって抽出された5つのカテゴリー、13のサブカテゴリー、500個の下位カテゴリーを通して分析し、第3節では、前述の5つのコアカテゴリー、13のサブカテゴリー毎に、「ストーリーライン」を用いて考察を行った。そして第4節において、中国人母2名の「日本への適応プロセス・モデル」の構築を行った。

#### **第4章 フィリピン人母の日本社会への適応行動に関する研究—グラウンデッド・セオリーによる分析—**

第4章では、日本人男性と国際結婚をし、日本で子育てをしたフィリピン人女性2名のインタビュー・データをグラウンデッド・セオリーによる分析を行った。使用するデータは、筆者が行った研究「フィリピン人母の日本への適応行動とそのプロセス—新たな『適応プロセス』モデルの構築」（浅井、2015）より得られたものである。第1節では、研究参加者であるフィリピン人母2名のそれぞれのフィリピン時代と日本来日後の概要を述べる。第2節においては、二人の語りを、グラウンデッド・セオリー・アプローチによって抽出された5つのカテゴリー、11のサブカテゴリー、124個の下位カテゴリーを通して分析し、第3節では、前述の5つのコアカテゴリー、11のサブカテゴリー毎に、「ストーリーライン」を用いて考察した。そして第4節において、フィリピン人母2名の「日本への適応プロセス・モデル」の構築を行った。

#### **第5章 グラウンデッド・セオリーを用いた中国人母とフィリピン人母の適応行動の比較**

第5章では、中国人母の日本への適応行動とフィリピン人母の日本への適応行動との比較分析を行った。第1節においては、第3章の中国人母2名のグラウンデッド・セオリー分析結果と第4章のフィリピン人母2名のグラウンデッド・セオリー分析結果の比較検討を行っている。中国人母とフィリピン人母それぞれから抽出された5つのコアカテゴリーごとに共通点・類似点・相違点を見ていった。第2節では、中国人母2名とフィリピン人母2名の「統合型異文化適応プロセス・フレームワーク」の構築を行った。

#### **第6章 中国人母とフィリピン人母の日本適応への径路—複線径路等至性アプローチ（TEA）による分析—**

第6章では、中国人母2名とフィリピン人母2名の日本への異文化適応行動を複線径路等至性アプローチ (Trajectory Equifinality Approach : TEA) を用いて分析した。第1節では、外国人母4名の個別のTEM図を描いた。第2節では、第1節の4つのTEM図から共通点・共通の行動をあぶり出して、「外国人母4名の統合型TEM図」を導き出した。第3節では、発生の三層モデル (TLMG) を構築していくことによって、外国人母4名の日本社会適応プロセスの意識の変容を可視化した。第4節では、「外国人母4名の統合型TEM図」に描かれた「社会的方向づけ (SD)」と「社会的助勢 (SG)」に着目し、外国人母たちが日本における人生の径路を辿るなか、日本社会からどのような阻害要因と促進要因を受けながら生きていったのかを表す「日本への適応プロセスにおける『SDとSGのせめぎ合い』図」描き出した。そして第5節においては、TEAによって明らかにされた外国人母4名の日本社会への適応について考察していった。

第3章から第6章へと続く、一連の分析によって得られた具体的な新たな知見 (結果) は、以下の通りである：

#### 1) 異文化適応した外国人母4名のグラウンデッド・セオリーによる分析結果

分析の結果、日本人男性と国際結婚をし、日本で暮らす中国人母2名の日本への適応を構成する要素として、5つのコアカテゴリー、13のサブカテゴリー、500の下位カテゴリーが抽出された。また、フィリピン人母2名では、5つのコアカテゴリー、11のサブカテゴリー、124の下位カテゴリーが抽出された。本研究では、「中国人母2名の日本への適応プロセス・モデル」と「フィリピン人母2名の日本への適応プロセス・モデル」を構築し、この2つのプロセス・モデルを比較分析した上で、統合型フレームワーク「中国人母2名・フィリピン人母2名の日本への適応プロセス・フレームワーク」を構築した。統合型の【コアカテゴリー】および〈サブカテゴリー〉は、以下の通りである：

##### [1] 【日本という異国での暮らしの中で多くの戸惑いや苦労を経験する】

- ① 〈自尊感情の喪失・半人前/周辺化〉、② 〈日本人夫・家族の外国人妻への期待・要求〉③ 〈日本語という「言葉の壁」・日本語習得の苦労〉

##### [2] 【日本社会へ自ら飛び込んでいき、自身の成長と進化を遂げる】

- ④ 〈日本語上達・習得のカギ〉、⑤ 〈日本社会へのアプローチ〉、⑥ 〈同胞コミュニティとの繋がり〉

##### [3] 【日本の社会に溶け込み、自信と余裕を持って子育てをしていく】

- ⑦ 〈子どもへの教育観〉、⑧ 〈子どもの中国人・フィリピン人アイデンティティ〉、⑨ 〈日本人夫の子育て・家事への不参加・無関心〉

##### [4] 【母としての責任を果たし、充実と安定した時期に入る】

- ⑩ 〈日本での生活・人生への満足感〉、⑪ 〈将来と老後の設計〉

[5] 【日本へ異文化適応した外国人母から見た異文化不適応を起こしている中国人母・外国人母たち】

⑫ 〈中国人母・外国人母たちの問題〉、⑬ 〈日本不適応を起こしている外国人母たちへのアドバイス〉。

## 2) 異文化適応した中国人母 2 名・フィリピン人母 2 名の複線径路等至アプローチ (TEA) による分析結果

分析の結果、外国人母 4 名の TEM 図では、以下の要素が抽出された：必須通過点 (OPP) には「来日・結婚する」、「妊娠・出産する」、「子どもが就園・就学する」；分岐点 (BFP) には「日本語教室に通う」、「子どもの幼稚園・学校には積極的に顔を出す」、「PTA 役員を引き受ける」、「子どもの教育に関心をもっている」、「子どもに自分の母国について伝える経験をもつ」、「日本人と共に仕事・ボランティア活動をする」；そして等至点 (EFP) には「日本語を身につけ、日本社会に自分の居場所をもちながら子育てをする」。さらに、分析の最終段階として、「発生の 3 層モデル (TLMG)」を描き出し、外国人母 4 名の深層を探った。第 1 層では、外国人母の行動レベル、第 2 層では、意識レベル、そして第 3 層では、信念・価値観レベルを表した。その結果、外国人母 4 名は、日本社会において日本への適応のプロセスを歩みながら、「日本で生きていくのだから、日本語を学び、そして日本のことを知ろうとする姿勢や日本人と交流しようとする気持ちをもち続けることが大切」という意識を自身のなかに獲得していったことが見出された。さらに、外国人母 4 名が、等至点 (EFP) へ向かううえで、何が彼女たちを「阻害・抑制する要因」となり、そして何が「促進・後押しする要因」となったのかを、より明瞭化するために、「中国人母 2 名・フィリピン人母 2 名の統合型 TEM 図」の社会的方向づけ (SD) と社会的助勢 (SG) に着眼し、「外国人母 4 名の日本への適応プロセスにおける『SD と SG のせめぎあい』図」を描いた。この図により、外国人母たちが日本における人生の径路を歩むなかで、「多様性への無理解」、「日本社会・学校教育の単一文化主義」、「外国人家族への支援体制の未整備」などの「阻害する力 (SD)」により苦労や困難を経験しながらも、「外国人母に寄り添う教師・保護者」、「セルフコンフィデンス」、「行政のサポート」などの「後押しする力 (SG)」によって困難を乗り越えていったことが見えてきた。

## 第 7 章 本研究の結論 (まとめ)

最終章となる第 7 章では、「結論 (まとめ)」として総括を行い、本論を振り返るとともに、本研究の成果・功績、質的研究の意義、そして今後の課題について述べた。

外国人母 4 名の「語り」をグラウンデッド・セオリーで分析した結果、彼女たちが「積極的行動」を取ったことで、「戸惑いと苦労」、「成長と進化」、「自信と余裕」、「充実と安定」

の4つのステージを経験していったことが導き出された。さらに、グラウンデッド・セオリーで抽出されたカテゴリーを用い、複線径路等至性アプローチ(TEA)の分析も行った。その結果、きめ細やかでクロニカルな外国人母4名の人生の径路が描き出され、彼女たちが、さまざまな支援に後押しされながら、また、彼女たちを周辺化しようとする日本社会の価値観や意識に苦勞しながらも屈することなく、妻として母として、一人の女性として生き抜いていく姿を浮き彫りにすることができた。また、上述の通り、彼女たちは日本での人生を歩むなかで、「阻害・抑制する要因(SD)」(すなわち、「多様性への無理解」、「日本社会・学校教育の単一文化主義」、「外国人家族への支援体制の未整備」など)によって苦勞や困難を経験しつつも、「促進・後押しする要因(SG)」(すなわち、「外国人母に寄り添う教師・保護者」、「セルフコンフィデンス」、「行政のサポート」など)によって、困難を乗り越えていったことが見出された。

外国人母の日本社会への異文化適応のプロセスを、本研究のように一人ひとりの詳細なライフストーリーを使って研究したものは日本では非常に稀である。複雑化する現代社会において、実証主義的なあるいは演繹的な研究アプローチのみでは、社会が直面する、深刻な待ったなしの問題の解決を遅らせるだけになりかねない。その社会問題の当事者や経験者、さらに言えば「サバイバー」の生の声、経験の「語り」を丹念に分析することの意味は、今後ますます求められるものになると信ずるところである。

## 引用文献

- 浅井直子 (2015) 「フィリピン人母の日本への適応行動とそのプロセス—新たな『適応プロセス』モデルの構築」『明星大学通信制大学院研究紀要 教育学研究』15, 3-12.
- Charmaz, K. (2000) Grounded Theory: Objectivist and Constructivist Methods, N. K. Denzin & Y. S. Lincoln eds. *Handbook of Qualitative Research*, 2<sup>nd</sup> ed., Sage, 509-535.
- サトウタツヤ (2015a) 「複線径路等至性アプローチ (TEA) —TEM、HSI、TLMG」安田裕子・滑田明暢・福田茉莉・サトウタツヤ編 『TEA 理論編—複線径路等至性アプローチの基礎を学ぶ』新曜社, 4-8.
- サトウタツヤ (2017a) 「TEMの発祥とT・E・Mの意味」サトウタツヤ編著 『TEMではじめる質的研究—時間とプロセスを扱う研究をめざして—』誠信書房, 1-16.